

道は1本だけじゃない

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

学生時代、山谷で子ども会活動をしていたことがある。新聞の三行広告を見て出かけた山谷は、独特の雰囲気があったとはいえ、「生活」の場であった。男と女がいて、子どもたちも大勢いた。押入れも床の間もない4畳半の部屋に父親と母親と双方の連れ子が3人4人ひしめきあっていて。おとなの顔色を窺うことに長け、子どもらしくない目をした子どももいたけれど、みんなたくましく生きていた。子ども会活動は楽しかったし充実していたが、教師の目を盗んで授業をさぼることには限界があり、実習が本格的に始まったこととも関連して、私の足は山谷から次第に遠のいてしまった。やり始めたことを中途半端に放りだしてしまった後ろめたさはずっと残り、あの子たちはどうしているのだろうかと今でもふっと思うことがある。それに私は山谷の住人たちが、やむを得ずであれ、自分で選択してであれ、私にはできない生き方（たとえば孤独に耐えることなど）をしていることにある種の羨望を抱いている。だから4畳半の簡易旅館から新しいベッドハウスへと様変わりし、子どもたちはもういなくなってしまったことを人伝に聞いても、私は山谷という言葉について反応し、山谷と名のつく本を買わずにいられない。本書も、そのような流れのなかで購入したものだ。

紹介文によれば、著者は「公立大学の経済学部を卒業し、サラリーマンになるが續かず、転職を繰り返す。工員生活などを経て、77年大阪西成で労務者になる。87年から、東京山谷に

移り現在にいたる。2000年、本作品にて第九回開高健賞を受賞する」という人だ。ここで綴られるのは、山谷の日常。一部屋に二段式ベッドが4つのベッドハウス、そこで聞こえてしまうおならやげっぷ、あるいは新聞や本をめくる音、カーテン越しに丸見えになる他者の動静、隣人の足の臭い、その部屋で、あるいは仕事で出会うさまざまな人々、著者の思いが淡々と静かに紡がれていく。

著者の転職の理由はこうだ。集団生活に対する恐怖心から、職業生活を始めるとき過剰なほどの適応意欲をかきたてる。しかしそのような無理は長くは續かず、身体の変調に見舞われるとともに出社できなくなり、生活が破綻してしまうのである。そのように転職を繰り返し山谷にたどり着いた頃には「つまるところ、私は人生に向いていない人間なのだ」と結論づけるようになっていたという。だから著者は（山谷での）「生活が快適なものであろうわけではないが、（中略）何とかして運命愛に近い態度を作り上げようとし」、今では「釜が崎や山谷というような社会的場所がなければ私はどうなっていただろうと思うとゾッとする」という境地に達している。

そんな著者の山谷での日々への思いは、不遇な人生への怒りや絶望でもなく、落ちこぼれの居直りでもない。このような生き方を冷静に、ある意味できわめて客観的に示されると、生きることの不思議さをしみじみ感じさせられる。歩く道は1本ではないのだとも思う。 ▲



さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ・・・。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374